

空



2010・8

**SORA** 32号

# 秘 仏

柴 田 佐知子

子が草を詰め込みすぎし螢籠

黒南風や秘仏は更に布巻かれ

形代に山雨一滴轟けり

極楽の色を放てる道をしへ

太陽が真上に来る袋角

自由かと蟬の抜け殻より問はる

正論は袋叩きにされビール

—「俳句ウエップ」57より—

形代の振袖に色なかりけり

蟻たちは蟻の地響き立てて進む

海底へ熔岩原つづく日の盛り

三伏や灰をふりまく桜島

熱帯魚鬩ふ背鰭尖らしぬ

—「俳句研究」夏号より—

剥がれたる筍の皮うごめける

砂山の芯まで濡れて半夏生

白墨を打ちつけて書く夏期講座

祭馬地団駄踏んでゐたりけり

竜宮へ姫の手招き箱眼鏡

三伏の足張つて亀首伸ばす

単純な色にひらきし水中花

香水のぶつかり合へる夜の宴

足の先地獄に入れて涼みけり

# 横顔

高倉和子

雲の峰怒りは父のものなりし

夏空の中にほどきて組体操

割り切つて笑ふ他なし心太

足並みを揃へ祭の男たち

祭馬鼻を鳴らして過ぎにけり

大仰に扇を開く夏芝居

呼ばれたるやうに覚めたる昼寝かな

目を凝らす網戸の外の世の中に

夏負けて思はぬのを買ひにけむ

夜の窓に横顔のあり水中花



# 桐下駄

中田みなみ

初蟬に礼を言ひたき朝迎ふ

日本は素足の季節桐の下駄

黒を着て蛭狩へと出掛けたり

天の川鬼籍の人ら列なして

まくなぎのかたまり解けし暮色かな

仏壇に鬼灯一つ炎えてをり

ラムネしゅつとまだまだ伸びる新タワー

梅雨の碑「木の美ナナ」の歌碑あればに「踊り恋して流れし」と

踊り子碑見しほとぼりの黒揚羽

下駄履きしばかりの足に祭笛



# 主よ

荒井千佐代

菖蒲池と沼うやむやに隣り合ふ

厨より家々灯る花朱燦

螢火の中のふたつは父母の魂

鉄骨を投げ置く音や梅雨旱

主よ石で打たるるべきは蛇か我か

廃船に草伸び切つて日の盛り

海南風むかし産婆が取り上げて

石ふたつ立てたるが門雲の峰

さるすべり死者の茶碗を割りて埋む

われは母かをんなか妻か鯛雲



# 襖のごとく

服部 早苗

花卉のひやりひやりと牡丹散る

花石榴閉ざして暗き製餡所

梅を干す襖のごとく人を断ち

犬小屋に犬は居らずよ合歡の花

船底のごとき空濠木下闇

蜘蛛の囿の忍び返しにかけてあり

藁束五百雨乞の籠作り

夏風邪の子やひとさじを拒みたる

縛られて天草の荷や流人めく

昼顔の今日一日を働けり



## 空 蟬

小林 朱夏

## 広 場

苑 実耶

蒙古塚蜘蛛は全てを広げをり

木の間より寝釈迦の螺髪山笑ふ

虫干に男物なき母の家

暮るるまで迎へ来るまで野に遊ぶ

向日葵の蕾はすでに大人びて

夏きざすひさしを曲ぐる野球帽

最初の子に割られて終る西瓜割

母と座す宿や夕焼の筑後川

夏帽子色褪せるまで遊びたる

父さんのおどうぐ箱や麦の秋

夕立のその上にある棚田かな

落雷に動ぜず乳房含ませり

空蟬の声も混じれる蝉時雨

貰はるる犬に眉毛や花の昼

空よりも大きい夕焼となりにけり

草取れば猫の広場となつてをり



# 遣唐船

柴田志津子

上

下

秋

千

晴

礎石野の空のひろさや夏雲雀

イチローのバット垂直夏の雲

南風や遣唐船は朱を尽し

めまとひの子の高さにも上下して

山城を圧さへて立てり雲の峰

売れ残る金魚は今日も揺らされて

農道のはつきり見ゆる金鳳華

蚯蚓出て這へば這ふほど砂衣

狐の提燈十三仏の膝の丈

露草に乳房が届く阿蘇の牛

つつがなくけふの暮れゆく野萱草

人もみな祭太鼓に揺らぎぬる

ふるさとの水簍れしと螢守

蒙古塚まで蜘蛛の巣を割りながら

山内の闇を深めて木の葉木菟

鯛雲つまみ置きたるやうな島

浮袋

あさなが捷

青葦

矢野百合子

戦乱に寵妃ありけり合歡の花

夢塚は人に見られず梅は実

早暁の音無く蟬の生まれけり

沈鐘の音混じりたる夏怒濤

地球の向かうより湧き上がる雲の峰

老鶯や灘を鎮めし岬宮

浮袋をたたみて顔の大人びし

名島門くぐればけふる花檣

傷つかぬ顔で別れし夏衣

すぐ下は奈落と知らずみずすまし

納涼船湾を大きく右まはり

筒を得てこの世見渡す穴子かな

待つことにすこし倦みけり天の川

父の日の朝や鴉が鳴くばかり

葉包をそつと開きし今朝の秋

青葦の高さにありぬ風の道

道をしへ

吉村 撰 護

日本語

鳳 蛮 華

睦まじき兄すでに亡き虎が雨

梅檀は曖昧な花日本語も

浮いてこいリストラされても浮いてこい

木漏れ日に踊子草の踊りの輪

沖膾戻りて修羅の人となる

夕づつに連られ蝙蝠盲飛び

道をしへ長方形の空を持つ

夏座敷家族のごとき古ミシン

昔日の面悌はなし夏館

横目また上目遣ひに祭笛

地下足袋を重ねし枕三尺寝

水差して金魚玉てふ凸レンズ

ネーブルの根より天牛髭を出す

矢車菊故国離れて色淡し

口中に螢火灯る水の闇

銀舍利と梅干しに足る滋味浄土